長崎・五島巡礼研修

田中　圭祐

8 月 5 日～8 日まで、日本カトリック学校連合会主催「長崎・五島巡礼研修」に参加しました。その報告レポート（抜粋）を紹介させていただきます。「世界遺産への登録過程」や「禁教時代を生き抜いた先人の生き方」などを通して「共生社会実現」について考えてみたいと思います。

A,世界文化遺産登録

当初、長崎県では、地域の資産を公共財としていかに保全活用していくかということを運動の出発点にユネスコ世界遺産委員会に対して、**「長崎の教会群とキリスト教関連資産」**というタイトルで、世界遺産への推薦書が作成されましたが、ICOMOS（ユネスコに代わって世界文化遺産の調査や審査を行う組織）から、登録のためには、『禁教時を生き抜いた歴史と伝統』こそが日本らしいので、テーマを絞るようにという助言を受け再検討。世界遺産の構成資産に指定された 12 件の名称は、「教会・天主堂」から「集落」へと変更された。当初のねらいであった“長崎の教会群“の保全活用という点からは、課題は残ったまま**「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」**というタイトルに変更することで、2018 年 6 月に世界文化遺産として登録されることになりました。

長崎にある約 130 もの教会のうち 50 あまりが五島列島で、その殆どは、1873 年（明治 6 年）に禁教が解禁された喜びで、各集落に教会が建てられたものだ。「老朽化」と「人口減少」が進行する中、教会を保全する人間がいないと、**廃堂となるしかない運命**が待ち構えている、そんな教会が年々増えているそうです。

旧五輪教会堂：久賀島の中で未だに直接車で行くことができない陸の孤島。老朽化で解体される寸前、島内の仏教徒の助言によって、価値が再確認され、五島市に移譲、文化財として保存されるも、近隣家族は 1 世帯のみ。

B,キリシタン弾圧の歴史と五島列島における迫害

約 260 年間キリスト教徒は存在しなくなったとされていた日本で 1865 年に“信徒が発見”されたことは、当時のヨーロッパでも大きな話題になりました。潜伏キリシタンの人々は、宣教師と出会うことで、自らの信仰を表明できるようになると、①カトリックに復帰した人　②寺請制度などで保護されたまま仏教徒になった人　③先祖から伝え聞いた教えを守り抜いた人の 3 つのタイプに分かれたそうです。③は、『隠れキリシタン』と呼ばれ、現在でもひっそりとその信仰を守っている人がおられるとのこと。（※これはキリスト教ではなく独自の宗教だと定義する人もいます。）

1868 年（明治元年）明治に変わっても、久賀島（ひさかじま）内の信徒たちが捕らえられ、残酷な責め苦を受けます。五島におけるキリシタン弾圧のきっかけともなった「五島崩れ」。自らキリスト教の信仰を表明した者が捕らえられ、12 畳ほどの狭い牢に 200 名あまりが押し込められました。

畳 1 枚あたり 17 人という狭さで、横になることもできず、排泄もその場にしなければならない想像を絶する惨状が 8 ヵ月間続き、その間に、飢えや病、拷問のために 39 名、出牢後の死者 3 名を加えると 42 名の信徒が命を落としたそうです。

実際に牢のあった場所から、海の向こう側に小さく鳥居が見えました。食事は、朝夕にサツマイモ 1 切れのみで毎日のように子どもを牢から出して、（キリスト教を）「棄てる、と言って神社に向かって手を合わせれば、このご馳走を食べさせてやる。」と牢の前に、ご馳走を並べ、子どもに棄教を迫る様子を牢内の親に見せつけたという話を長崎巡礼センターのガイド（入口氏）から聞きました。

最終日には、かつては潜伏キリシタンの家系として、今ではカトリック信徒として生活されている家庭を訪ねて話を聞くことができました。　（次頁へ）